

『草の葉』第1版に見られる文学的工夫と読者の反応

山 内 彰*

Whitman's Literary Ingenuities and the Reactions of the Readers of the First Edition of *Leaves of Grass*

Akira Yamauchi

要旨：19世紀アメリカを代表する詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）は、1855年に『草の葉（*Leaves of Grass*）』の第1版を出版した。そのときに、彼はいくつかの文学的創意を行っている。その主たるものとして、(1) 肖像画の利用、(2) 新しい文体への挑戦、(3) 新しい語彙の採用が挙げられるだろう。こうした工夫の目的は、当時のアメリカで支配的だったヨーロッパ文化の模倣をやめて、アメリカ独自の個性をつくりだすことにあった。そして、ホイットマンがそうした独自性の樹立者であることを彼は多くの人間に知らしめ、アメリカモデルの創始者としての地位を希求したと考えられる。それに対する当時の読者の反応を考察し、一般的に言って、知識人からはそのようなものとしてある程度認知されたが、一般大衆からはほとんど無反応であった事実を浮き彫りにする。

Abstract： When Walt Whitman, a poet in the 19th century America, published the first (1855) edition of *Leaves of Grass*, he created several new literary ingenuities. For example, he used an engraving instead of the author's name, he applied new styles that were completely different from the conventional European styles, and he adopted a new vocabulary peculiar to America. The purpose of these ingenuities was to get rid of European imitations and lead to new developments fitted to America. He tried to gain the position as one of the founders of those new American conventions. This thesis examines his intentions and the reactions of the readers in the 19th century.

Key words： アメリカ文学 American literature ウォルト・ホイットマン Walt Whitman 『草の葉』 *Leaves of Grass*

I

ホイットマン（Walt Whitman）が1855年に出版した『草の葉（*Leaves of Grass*）』の第1版のねらいの一つに、自由、民主主義、平等といった「アメリカ的信念」の表明があったのは

周知のところであろう。彼はこの詩集を上梓する以前はもっぱら新聞の編集者を生業としていたが、アメリカには、それまでのヨーロッパとは異なる「アメリカ的信念」を表現する媒体が必要であることをその新聞紙上で繰り返し説いている。たとえば、自ら編集者となった『オー

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

ロラ (Aurora)』紙の記事の中で「われわれは真のアメリカ人であること誇りに思う」(Journal 105。以下、J と表記する。)と書いて、「真のアメリカ人」であることの重要性を説いている。そしてさらに、新聞の役割とは「多数の人々を知的で、有能で、共和国の自由人として義務を果たせる人間に育てる」(J 74) ことだとも指摘しているのである。つまり、新生国家アメリカにふさわしい人間を育てることが新聞の重要な役割であり、アメリカ独自のものを称揚し、さらには実現してゆく必要があると彼は主張していたのであった。

このようにホイットマンが「アメリカ的なもの」を前面に打ち出したのは、逆説的に聞こえるかも知れないが、19 世紀前半のアメリカには「アメリカ的なもの」が十分には存在していなかったためである。当時のアメリカは、先進的なヨーロッパ文明からかなり遅れた辺境の国であると考えられており、そこに見られるほとんどの文化はヨーロッパからの受け売りであった。文化だけでなく、ヨーロッパの影響は思想や政治制度、社会生活一般に至るまで、アメリカ全体に広く及んでいた。先ほどの「真のアメリカ人」としての誇りについて言及した記事の続きには、「われわれの間には多くの危険な影響力——思想、社会習慣、ある程度は政府さえも——この国を旧世界の古びた体制に同化させてしまう影響力がはたらいている」(J 106) とあって、ヨーロッパという旧世界の影響を受け、新世界アメリカの思想や社会習慣は、独自の特徴を帯びたものというよりも、旧世界とほとんど変わらぬものになっている点を批判している。さらに、1842 年の『イーブニング・タトラー (Evening Tattler)』紙に載った彼の記事では、「アメリカ人は [・・・] 外国の名士を重んじ、ご機嫌をとる傾向がつよい、つまり、きわめて馬鹿げた真似をする傾向があるのだ」(J 148) と書いて、アメリカに見られる模倣文化を手厳しく非難した。

アメリカとは、ホイットマンにとって、ヨー

ロッパと異なる、新しい価値観に基づく国家でなければならない。民主主義、自由、平等、大衆の重要な役割といった、アメリカならではの「アメリカ的信念」が必要だと考えられていたのである。それにもかかわらず、当時のアメリカの大多数の人間はヨーロッパと大同小異の文化に従って生きていたのであり、この点がホイットマンにつよい不満を抱かせていたのであろう。そもそもヨーロッパは、アメリカと違って、王制や貴族制の国家であり、その社会的な差別構造は、民主国家たるアメリカには決して根付かないはずのものであった。ホイットマンはイギリスについて「膨らんだ寄生虫に棲みつかれた政府、それに、偉そうな貴族ども」(Marinacci 64) と書いてイギリス政府を徹底して嫌悪し、非難しているが、ここには非民主世界としての旧世界ヨーロッパと新しい民主主義世界アメリカとの対照が鮮明に示されている。旧世界とは決定的に異なる、アメリカに適合するような新しい文化の創造こそが急がれていたわけであり、その点をホイットマンは繰り返し新聞紙上で訴え続けていたのであった。そして、この主張は 1855 年に書かれた、『草の葉』を自ら宣伝するための広告文の中でも何ら変わらない。その広告によると、『草の葉』の文章は「この時代の自由な精神と一致したもの、アメリカの政治の真実に一致したもの、地理、天文学、骨相学、それに、人相学に一致したもの」(Hindus 40) に他ならないのだと、ホイットマンは高らかに宣言している。

もちろん、このようにアメリカ独自の文化を追求したのは、何もホイットマン一人に限られていたわけではない。むしろ、19 世紀にこうした主張を展開することは頻繁に見られた現象であり、たとえば、エマソン (Ralph Waldo Emerson)、フラー (Margaret Fuller)、ロングフェロー (Henry Wordsworth Longfellow) といった、当時の代表的な思想家や文学者たちも、盛んにこの点を話題にしていたのであった (Schyberg 16)。一例として、ロングフェローの小説

から該当場面を挙げれば、「われわれは、この山や川と一致した国民文学を望んでいるのです。ナイヤガラや、アリゲーニ山脈、それに五大湖と一致したものを！」(Allen 5-6)という記述を見ることができる。また、ホイットマンの知人であった、彫刻家のブラウン (Henry Kirke Brown) は「私は、古代、近代の古めかしい巨匠たちから自由になったので喜んでいる」(Bohan 21) と述べて、旧世界からの離脱こそ、いかにもアメリカ的な芸術活動につながるのだと主張していた。さらに言えば、この時代、「若いアメリカ人たち (Young Americans)」の運動が盛んに行われていたが、その趣旨はヨーロッパから離れて、アメリカ独自のものをつくりだそうとする運動であった (Zweig 54)。そして、先ほどの『オーロラ』紙の編集者に彼が就いたのも、そもそもこのアメリカ的なものを描こうとしていたホイットマンに『オーロラ』紙のオーナーが注目したからに他ならない。同紙はホイットマンが編集者に着任したことを知らせる記事の中で「アメリカの大衆は、真のアメリカ精神に染まった新聞の必要性を痛感している」(J 76) と書いて、ホイットマンの役割がアメリカ精神の普及にあることをはっきりと示してみせた。

以上考察してきたように、旧世界の体制や思想から離れて、アメリカ独自の、新世界に適合する表現形式を編みだすことが、19世紀中葉の切実な大問題であり、アメリカ中にのしかかっていた焦眉の問題なのであった。この文脈を理解すれば、ホイットマンが新聞の編集者として、ある一家の歌声に感銘を受け、応援をなぜ続けたのかが理解できるだろう。ホイットマンはチェーニー一家という家族で歌団を結成している一家の歌声を聞き、たいへんに感動したのだが、そのときの様子を次のように記している——「わたしたちは、アメリカ音楽の様式に独創的で美しいものをついに見出し、耳にし、そして、目にしたのだ。」(J 202)。旧世界にはない、アメリカ的な、まさに「真のアメリカ人」

にふさわしい音楽を見出した喜びが、この歓喜に溢れた文章に鮮明に表されているだろう。そして、このチェーニー一家が音楽で成し遂げたことを、ホイットマンは文学の世界で達成しようと試みたのであり、それが1855年に出版された『草の葉』だったのである。

だが、こうした真にアメリカ的なものが求められていたとしても、今度はそれが一般のアメリカ人に受容されなければ意味がないだろう。というのも、ヨーロッパと異なり、民主国家アメリカの主人公は一般大衆であって、一部の王侯貴族やエリートではないからである。すなわち、ホイットマンが予定した読者というのは、ごくふつうの一般的な人間であり、そうした平凡な人々を「共和国の自由人」として育成することこそ、彼に課せられた肝要な任務だったからである。だとすれば、彼の作品はまさしく一般大衆に受容されてこそ、アメリカ的な価値を帯びることになるだろう。ホイットマンが「吸収する (“absorb”)」という言葉を用いて詩人と国家の関係を述べるとき、このことが背景にあったに違いない。

詩人であるとの証明は、詩人がその国を吸収した情熱と同じくらいに、国もまた詩人を吸収することで行われる (“The proof of a poet is that his country absorbs him as affectionately as he has absorbed it.”) (*Leaves of Grass* 731)

詩人が本物かどうかの証明とは、国がその詩人を「愛情をもって吸収する (“absorbs . . . affectionately”)」ことにあるとホイットマンは述べている。すなわち、国民から熱狂的な歓迎を受ける詩人が求められているのであり、そのような国民的詩人になることこそ、ホイットマンの夢であったということが窺われるのである。これまでのヨーロッパ文化にはない、新たな独自性を有する文学を提供し、そのことによって真にアメリカらしい詩人として熱狂的に迎え入れ

られることが、ホイットマンの眼目だったはずである。本稿では、こうした国民的詩人になるという彼の希望と、そのために用いられた文学的手法、ならびに、当時の読者たちの反応を比較することにより、詩人の理想はどのような結果に至ったのかについて考察したい。

II

前節で述べたように、ホイットマンは 19 世紀当時の文化の大部分がアメリカ独自のものというよりも、ヨーロッパの模倣に過ぎず、独創性を欠くものである点に不満を抱いていた。じっさい彼は、この事実について、自ら編集を担当していた新聞記事の中で何度も嘆いている。たとえば、1842 年の『オーロラ』紙では、「外国のものなら何でも模倣してしまう、たいへん趣味の悪い癖」がアメリカに存在していると書いている (*New York Aurora* 18)。また、アメリカで上演されている演劇について「どうしてわたしたちはアメリカの劇という名に値するようなものを持っていないのか (“WHY CAN'T WE HAVE SOMETHING WORTH THE NAME OF AMERICAN DRAMA!”)」と、大文字ならびに感嘆符まで用いて批判文を展開している (Marinacci 79)。あるいは、「われわれアメリカ人にかんして言うと、旧世界の道を唯々諸々と子どもみたいにもう十分すぎるくらいついでまわってきた」 (*Uncollected Poetry and Prose* 104。以下、UPP と表記する。) という批判文にも、同様の趣旨を見てとることができるだろう。もちろん、第 I 節で見たように、こうしたアメリカ独自の文化の必要性を唱えていたのは、何もホイットマン一人に限ったことではなかった。しかし、そうした中にあっても、ホイットマンがかなり執拗にこの点にかんして批判を展開していることは注目すべき事実であろう。ホイットマンがこのように、アメリカには独自の文学が必要だと主張したのは、「ほとんどこの国にもその国特有の言葉使い (“idioms”) がある」からであり、「わが国に厳密に

ふさわしく適合する (“strictly good and fitting to our own nation”)」 (UPP 104) 文学を希求していたからである。彼は 1840 年代においてジャーナリストとしても活躍していたのだから、こうした期待を自ら表明するだけでなく、このような風潮がアメリカ中に広まっていたことを肌で感じ取っていたはずである。『草の葉』出版前に、彼がそのノートの中で「私が手にしたい詩人とは、この国で一つの力となるに違いない。この国で人々を熱中させる力になるに違いない」 (*Notebooks and Unpublished Prose Manuscripts* 144。以下、NUPM と表記する。) と記していることからすれば、国民から熱狂される詩人の出現を彼自身待ち望み、またそうした詩人は「人々を熱中させる力 (“an engrossing power”)」になるはずだという確信が彼にはあったと言えるだろう。だから、ホイットマンの『草の葉』は、まさに彼が体感していた、こうした国民的な期待——すなわち、これまでのヨーロッパ追従主義を変えてくれるような文学の登場——に対する 1 つの回答であったと解釈することも許されるだろう。彼は、『草の葉』をそうした国民文学の代表的作品として当時の読者にとらえてもらいたかったのであり、そのために従来の文学では試みられなかったような新たな工夫をさまざまに考案し、実践してみせたのである。そこで、まず、そうした工夫の中から代表的な創意を 3 つ考察し、作者の考え方で、それに対する当時の読者の反応を比較、検討してみることにしよう。

1 肖像画の利用

『草の葉』第 1 版を開けたときに誰もが感じる「奇妙な (“odd”)」 (Hindus 23) 点は、その冒頭に掲げられた肖像写真であり、そして、どこにも作者ホイットマンの名前が見当たらないことだろう。肖像写真だけあって、作者の名前がないという 2 つの事実は相互に深く結びついており、ホイットマン自ら「名前は扉になく、半頁相当の肖像写真があります」 (Trachtenbert

65) と、自分の作品の広告の中でわざわざ紹介しているほどである。つまり、ホイットマンは、当時の慣例であった作者の名前を出す代りに、自分の写真を掲げて意図的に代用したことになる。

名前がこのように明記されていないという点は当時の多くの読者も気づいていた特色であり、たとえば、エバレット (Edward Evarett) は「出版者の名前がないので、読者のみなさんが本屋にこの本を求めにいっても、初めはわたしたちもそうされたように、そんな本はございませんとか、今までに見たことがありませんとか言われるかもしれません。しかしながら、そういう本は実在していますし、この本を手に入れるためなら二度ばかり本屋に足を運ぶ価値は十分にあります」(Hindus 48) と述べている。自分の名前を作者名としては掲載せずに、本文中に出てくる一番長い詩（後に“Song of Myself”と呼ばれるようになる詩）の中にのみ登場させるというこの奇妙なやり方は、当時の一般的な出版慣習を破ったものであった。言い換えれば、資本主義世界の樹立とともに重みを増してきた所有権という概念を放棄したとも表現できるわけで、事実、ホイットマンは後年この点にふれて、『草の葉』に作者の名前を入れるなどということは「宇宙に名前を書きつける」にも等しい行為であり、『草の葉』を「誰か一人の人間に所属しているなどと思うことは、ばかげたことだろう」(Trachtenberg 65) とコメントしているのである。すなわち、敢えて作者の名前を出さず、代りに肖像画を掲げることで、ホイットマンは『草の葉』が一般大衆にこそ所属するものだと主張したかったのだろう。民主主義国家にあつては、誰かが権威的に教養の内容を指し示すのではなく、文化の担い手はごく平均的な人々でなければならないはずだからである。ホイットマンは写真（当時は、ダゲレオタイプ）につよい影響を受けているが、その理由の1つに、写真がすべてを万遍なく写し撮り、権威主義を否定しているように思えるか

らという事実があった。この点について、フォルゾム (Ed Folsom) は、以下のように説明している。

写真の観点からホイットマンの詩について考えてみるのは有益なことである。というのも、ホイットマンは写真と詩を新しく出現してきた民主的芸術 (“an emerging democratic art”) の鍵として、すなわち、経験を平均化し、ヒエラルキーを破壊し、差別を無化し、平等を育む芸術の鍵として連想していたからであった。(Folsom 275)

写真は、従来の絵画のように画家による恣意的な取捨選択を行わず、焦点の合った部分をそのまま区別なく写し撮る。このことが、ヨーロッパ的なヒエラルキーの文化に対し、アメリカ的な平等の文化を連想させたのであろう。さらに敷衍すれば、写真と民主主義の関係について、ソントグ (Susan Sontag) はこう分析している。

前民主的な文化において、写真に撮られた人は有名人であった。アメリカの経験のこの開かれた分野において、ホイットマンが情熱をもってカタログしたように [中略]、誰もが有名人なのである。どの一瞬も他の一瞬より重要ということはないし、どの人間も他の人間より興味をそそるということもないのだ (“No moment is more important than any other moment ; no person is more interesting than any other person”)。(Sontag 23)

ソントグも述べているように、写真はすべてを平等に写し撮るだけではなく、まだ写真が珍しかった当時においては、そこに写ったすべての人物はそれだけで有名人になれるのであった。写真はごく普通の人物や事物を一举に著名にしてしまい、ヨーロッパのような社会的地位に連動しなければ有名になれないということは

ないのである。写真は、当時このようにきわめて民主的な機能を有していると信じられていたのである。そして、ホイットマンはその写真に基づいて描かれた肖像画を作者の名前の代りに、『草の葉』冒頭に掲げたのであった。このように所有権を放棄し、詩集を作者だけの所有物と考えないという行動は当時の一般的な読者を驚かせたわけだが、それは偶然になされたというよりも、明らかにこれまでの文学的慣習を破るために行われたと言ってもよいだろう。

そして、名前を出す代りとして掲げられた肖像写真も、当時の常識からすれば、いかにも奇妙なものだった。通常、肖像写真と言えば正面をまっすぐに見すえた胸像画のことであり、きちんと正装した格好で写るのがよいとされていた。しかし、ホイットマンが『草の葉』冒頭に掲げた肖像写真は、オープンシャツをまとい、身体をやや斜めに向け、手をポケットに入れた全身像であった。このポーズに当時の読者らは驚き、たとえばデーナ (Charles A. Dana) は、かなりの長文で、この見慣れぬホイットマンの肖像画のポーズを紹介してみせている。また、約 10 年後の 1864 年になっても、「歴史家、作家、小説家、編集者」として尊敬されるような人間になろうとしても、「立ち姿で写真を載せたりすれば、まず間違いなくその目的を打ち砕き」、「その態度の新奇さと奇抜さ (“the novelty and strangeness”)」で人々をびっくりさせることだろうと注意が喚起されている (Trachtenberg 62) ことからすると、1855 年の段階で出版されたこの肖像画はかなりの衝撃を読者に与えたはずである。すなわち、ホイットマンのとったポーズはそれまでの肖像写真における常識を破ったものであり、格式ばったポーズのとり方に対して、自由で気さくな一般庶民をイメージしたものであったと言えるだろう。このことは当時の読者らにも伝わったはずで、先ほどのデーナは「彼 [ホイットマン] は、自分の詩にわたしたちを導き入れる前に、わたしたちの時代の遅れた精神を明らかにし、アメリカ詩人の本当

の機能 (“the true function of the American poet”)」[Hindus 22] を示そうとしているのだと、肖像画について注釈を加えている。ホイットマンは当時の考えからすれば異例とも呼べる形態の肖像画を入れることで、それまでのヨーロッパ的な上流社会を象徴する人物としての詩人を、アメリカ的な民主的意義を帯びた存在へと転換させたのだが、その点をデーナは理解していたことになるだろう。この肖像画について、ボーハン (Ruth L. Bohan) は「この版画は詩人の自己実現を具体的に表わしているとともに、読者自身の新しい人間の在り方を視覚化し、その結果、そのモデルを発見する手助けとなっている」とまとめている (Bohan 33)。つまり、常識破りの肖像画は、たんにホイットマンの新しい人間像を明示しているだけでなく、読者にとっても新たな人間像のモデルを提供しているということになるだろう。このような点を考慮すれば、詩人が新たに用いた肖像画は、当時の読者層に一定の衝撃を与え、『草の葉』の革新性を印象付けることに成功したと考えてもかまわないだろう。

2 新しい詩のスタイル

先ほどのデーナは肖像画以外にも、『草の葉』についてつよい関心を示していた。そのうちの 1 つが、ホイットマンが利用した韻律を伴わないという詩形であった。デーナによれば、この詩集は「明らかにその外面の形式に独創性があり、作者自身の脳から生み出されたものである (“They are certainly original in their external form, have been shaped on no pre-existent model out of the author's own brain.”)」(Hindus 23) とのことであった。こうした特色は、もちろんホイットマン自身が意図したところであって、デーナによって見事に把握され、認識されていた部分だと言うことができるだろう。ホイットマンは 1855 年に自ら詩集の宣伝のために出した広告文の中で「彼からは [中略] 韻の響きなど

何一つとして聞こえてこない (“Not a whisper comes out of him of . . . the rhyme of poetry”) [Hindus 35] と得意げに記している。そして、詩人は「古代や古典からも、ヨーロッパの王制や貴族制やその文体からも一切例をひかない (“Take no illustrations whatever from the ancients or classics . . . nor from the royal and aristocratic institutions and forms of Europe”）」ことを誓い、「自分流の巨匠 (“a master after my own kind”）」 (Perry 69-71) となることを目指したとも述べている。1850年代初頭のもものと推定されるノートの中では「アメリカは自分自身の詩を必要として」おり、それは「ヨーロッパの過去の出来事や人物」とは無関係であり、「なめらかな韻 (“smooth rhymes”）」のようなものであってはならない (NUPM 1587) と主張している。アメリカ独自の文学作品を追求したホイットマンは、従来のヨーロッパ詩の基本である韻を新世界には合わないものとして意図的に排除したのであった。アメリカでもそれまで当然視されていた韻律を踏んだ詩体を敢えて捨て去ることで、ギリシャ・ローマや中世文学、さらにヨーロッパ古典文学とも異なる新しいアメリカ文学の樹立を試みていたと表現してもいいだろう。すなわち、「最良の詩 (“the best poetry”）」とは「時代や場所に合った (“to the time and place”）」 (Perry 72) ものであるべきだと彼は考えていたわけで、ヨーロッパで広く受容されている文学のコンベンションを否定することこそが、アメリカにふさわしい文学を創造することにつながるのだと信じていたのである。このことは、『草の葉』第1版に掲載された「序文 (Preface)」の中で幾度も語られていることである。たとえば、アメリカには「アメリカの詩人がとるべき表現」(『草の葉』13) が存在し、ヨーロッパのように「押韻や一貫した形式を与えたり、対象に抽象的に呼びかけたり」することは、決して「詩の真髄」とは言えないのだと、彼は書いている (『草の葉』16)。また、晩年に受けたインタビューにおいても、「私の詩の文

体について言うと、韻律のあるものや自由詩は拒否したのだ、とりわけ自由詩は嫌だった、けれども、リズムには固執したつもりだ (“I cling to rhythm”）」 (Myerson 22) と、自分の文体がきわめて新しく、従来の押韻詩などを拒絶し、代りにリズムを中心に構成されたものであると述べている。

このホイットマンの新しい文学的試みは、当時の読者層にも注目されることとなった。先に述べたデーナ以外にも、『草の葉』第1版を批評した論考のほとんどが、この点についてふれているからである。たとえば、ノートン (Charles Eliot Norton) は、ホイットマンの詩に「韻がない」ことに気づいただけでなく、それが「自由詩 (blank verse)」の範疇にすら入っていないことを指摘している。こうした文体に批判的だったノートンは、ホイットマンの詩を「行に分解された一種の興奮した散文 (“a sort of excited prose broken into lines”）」 (Hindus 24) とでも呼ぶ方がふさわしいと書いている。あるいは、エバレットもホイットマンの文体を「一種の散文詩 (“a sort of prose poetry”）」 (Hindus 44) として解釈していた。こうした新しい文体について、当時の読者は戸惑った反応を見せているが、これは従来の伝統的技法に慣れていた読者にとってきわめて斬新に映ったためだろう。グリズウォルド (Rufus W. Griswold) は、ホイットマンの文体が「エネルギー」に満ちていることは認めながらも、果たしてこれが本当に詩と呼べるのか悩み、そもそもホイットマンは詩人の範疇に入るのだろうかとして、「この詩人 (?) [“This poet (?)”」] と疑問符をつけて記述している。グリズウォルドはホイットマンの文学的地位にこのように疑問符をつけただけでなく、詩人の創造的試みがよほど気にいらなかったらしく、「いったいどんな人間の空想がこのようなばかげた汚物の塊をつくりあげたのか想像もできない (“it is impossible to imagine how any man’s fancy could have conceived such a mass of stupid filth”）」 (Hindus 32) と、口をき

わめて罵っていてもいた。

このように、ホイットマンが従来の文学的伝統を破るために用いた詩の形式は、その評価に肯定または否定のいずれがあるにせよ、当時の読者層に注目されたことは間違いなく、その意味では、詩人の意図した試みは一定の成功を収めたと言ってもよいだろう。確かに否定的な見解が多いようにも見受けられるが、とにかく当時の読者に新しい詩の文体を用いていると認識されたことは間違いのない事実であろう。

3 語彙表現

ヨーロッパが貴族制であり、王制であるとするなら、アメリカは民主主義を標榜して誕生した、平等を旨とする新しい国家である。したがって、ホイットマンが『草の葉』の序文で主張するように、アメリカの詩人が力強く歌い上げるのは民衆一人一人であり、そこには平等の原理がはたらいていなければならないことになる。ホイットマンは、自らの詩を読むように読者に促すに際して、「何の引け目も感じずに読んでほしいし、平等の足場が崩れぬかぎり、君はぼくらを理解できる」(『草の葉』16)と、彼の詩集が平等に読者にその意味を開示する点を保証している。特別な文学的知識や文化的素養がなくても、平等という礎さえ確保されれば、誰にでも自分の詩の意味は伝わるはずだと、彼はここで主張しているのである。ホイットマンの目指すものが民主主義国家アメリカに独自の文学である以上、アメリカの一般的な読者が理解できるような詩を彼は書かねばならないわけである。だから、そこに用いられる表現や語句は、基本的で、平易で、分かりやすいものでなければならない。彼のノートによれば、「詩作のルール」とは「完全に透明で、ガラス板のような文体、小技をきかしていなくて (“artless”)、飾りのないこと (“no ornaments”)(NUPM 101) でなければならない。ヨーロッパの文学のようにさまざまな技巧や多くの装飾を付した文体ではなくて、直截的で、簡明

な文体を駆使して、詩集は書かれなければならないのであった。そして、こうしたホイットマンの意図もまた、当時の読者に意識されたようである。たとえば、ノートンは「この作家はよき書き方の慣例の用法を軽蔑し、それを自分が使う語彙にまで拡大している (“The writer’s scorn for the wonted usages of good writing extends to the vocabulary he adopts”)」と述べ、「以前に聞いたことも見たこともないようなことばや俗語表現 (“terms never before heard or seen, and . . . slang expressions”)」(Hindus 24) を使用していると続けている。従来の上流階層に特有の表記法や、ヨーロッパの伝統的な語彙を避け、ごく普通の読者が読んで理解できるような表現方法をねらったわけであり、それは序文で彼が書いた「漁師や木樵や早起きする人たち、庭園や果樹園や田畑に働く人たちが自然に寄せる強く激しい愛着」こそが「詩心」(『草の葉』16) であるとする考え方と軌を一にしている。漁師や農民といった、ごくふつうの庶民が読んで、理解し、感銘を受ける詩を書くことが、当時のアメリカの詩人に最も求められていることだと、ホイットマンは考えていたのであった。

つまり、彼の『草の葉』は一般的な読者なら読める語彙で書かれたものであり、ごく自然に理解できる表現方法によって記された書物なのである。だが、同時に、このことが従来の価値観に捕らわれた批評家たちからの非難を招く原因にもなっていた。先ほどのノートンは『草の葉』を高く評価しながらも、そこには「耐えられないくらいの粗雑さでできた文章——粗悪というわけでも、みだらというわけでもなく、ただ嫌になるくらい粗雑な文 (“passages of intolerable coarseness, —not gross and licentious but simply disgustingly coarse”)」(Hindus 30) があると、ローウエル (James Russell Lowell) 宛ての手紙の中で述べている。グリズウォルドもその粗野な響きにうんざりした様子で「大多数のまともな人間に嫌悪感を催させる (“disgust the

great majority of sensible folks”）」(Hindus 32)と、ふたたびホイットマンに対して手厳しい批判を展開している。また、別の論者もホイットマンの表現について、「その文体は荒っぽくて注意力を欠いている(“rude and rough, and heedless in its forms”）」(Hindus 53)と同じような見解を表明していた。要するに、どの論者もホイットマンの用いる語彙表現が粗野で野卑で、これまでの伝統的文学には見られないようなものである点を認識し、指摘しているのである。

上述のように同時代の批評家からは否定的なコメントが多かったのだが、こうした反応が返ってくることは、ホイットマンにとってある程度予測済みのことだったように思われる。彼の詩は「ある人にはきわめて悪魔的であり、また別の人にはきわめて神聖である(“Very devilish to some, and very divine to some”）」(Hindus 45)と、人によっては正反対に受け取られる可能性があることを、自ら認めているからである。また、詩(後の“Song of Myself”)の中でも、「ウォルト・ホイットマン、ならず者の一人(“Walt Whitman, one of roughs”）」と書いているが、この「ならず者(“rough”）」ということばは、当時「ニューヨークのならず者ほど卑劣で、危険で、忌まわしいものはない(“A more despicable, dangerous, and detestable character than the New York rough does not exist”）」(Clarke 118)と言われるほど、危険な響きを帯びていた。ホイットマンはそのことを知りながら敢えてこのことばを選んで使ったわけだから、彼の詩が「悪魔的」に響いたとしても、それはいわば想定内の出来事であったはずである。そうした批判を覚悟しても、なおホイットマンがこうした「悪魔的」な響きにこだわり、「粗雑な」表現を用いたのは、ごく普通の人間こそアメリカの民主主義にふさわしい存在だという信念ゆえのことであり、アメリカという国の特性に見合った詩人が使うべき言語表現を実践してみせたかったためであろう。一般庶民が日常会話の中で用いている語彙をそのまま詩の

中で表現することこそ、新しいアメリカ的表現に適したものだとはホイットマンは信じていたのである。だから、当時の批評家の多くがこの詩集を上品な家庭にはふさわしくないとみなし、その粗雑さを指摘する中で、それでもこうした表現方法に固執し、当時の読者層の一部の反感を買ってでも、従来にない新しい詩の語彙を敢えて利用したのである。事実、中にはこうしたホイットマンの意図を適切に理解した批評家もいて、たとえば、ファーン(Fanny Fern)は「ウォルト・ホイットマンよ、世界はまさに生まれながらの『生粋のアメリカ人』を必要としているのだ——淑女にではなく、女性に、紳士にではなく、男性に魅せられた人を(“Walt Whitman, the world needed a ‘Native American’ of thorough out-and-out breed – enamored of women, not ladies – men, not gentlemen”）」(Greenspan 149–50)と述べて、ホイットマンの試みが高尚なヨーロッパ文学ではない、アメリカ固有の文学的表現だと、歓迎の意を述べている。ファーンはまさにホイットマンが意図したところを理解し、「生粋のアメリカ人」が語る、純粋にアメリカ的な詩として高く評価したのであろう。

4 まとめ

以上、3点にわたって、『草の葉』がこれまでの文学とは異なり、アメリカ的な新しい性質の表現方法を求めてつくられたものであることを検討してきた。まず、所有権を放棄するべく、作家名を用いず、肖像画を使用したのは、当時としても画期的なことであった。また、その肖像画も19世紀当時の慣例から大きく外れたポーズをとっており、意図的に肖像文化の伝統を否定したものである。次に、詩の文体も、新興国家アメリカに適合するように、大衆が用いる話し言葉が随所に利用され、ヨーロッパの文学的伝統であった韻律は敢えて使われていない。また、語彙表現もやや乱暴なくらい野卑なことばを利用しており、「上品な文学的伝統

(genteel tradition)」への反旗を翻したものであった。そして、このような『草の葉』の独特の創意工夫は、当時の読者にもじゅうぶん気づかれており、賛成するか、反対するかはあるにせよ、多くの識者によって指摘されている。

こうした特色こそ、ホイットマン自らが追求したアメリカ的なものを生み出すための文学的工夫であり、当時の読者から高く評価されたという詩人の願いを体現した手法であったと言えるだろう。それゆえに、ホイットマンの詩集はときに高く評価されたり、ときに非難の対象となったりしたのであった。従来のヨーロッパの伝統的文学からみれば型破りなその創意工夫に対して、当時の多くの読者層からは批判を浴びる一方で、アメリカ的なものの創造を目指していた一部の批評家たちからは賞賛を受けたのであった。いずれにせよ、ホイットマンが意図した文学的工夫は、当時の読者らによって気づかれ、指摘され、批評されていたと言ってもよいであろう。

III

ホイットマンは晩年になって、『草の葉』を出版した経緯をいろいろと振り返りながら「あれは悲劇だったよ——あの本がたどった運命といたら」と悲しげに感想を述べている。そして、「どれ一つとして売れなかったんだから——ほとんど一部もだよ——たぶん、一つか二つ、いやおそらくそんなにも売れなかったかな」(Reynolds 340)と続けている。また、ある人物との会話の中で、第 1 版がどのくらい売れたのかと尋ねられて、彼は「ああ、お金の件にかんして言うなら、あの本はおそろべき大失敗だった (“the book was a dreadful failure”）」(Trimble 17)と返事をしている。さらに、彼が集めていた新聞のスクラップの中に、イギリスの詩人ワーズワース (William Wordsworth) に関する記事があるのだが、その記事の中でも「初め彼の詩は人気がなかった。その詩が書かれたものになる趣味の原則というのは誤って伝えられ

ていたし、馬鹿にさえされていた」(Asselineau 293) という個所に下線が施されている。ワーズワースの詩の内容やその解釈に対してではなく、ワーズワースがいかに人々の誤解にさらされ、それを耐えねばならなかったかという個所に下線が引かれていることからすれば、ホイットマンはまさに誤解を受け、受容されるまでかなりの時間がかかった詩人としてのワーズワースに共感していたと考えてもよいだろう。

このような言動から判断すると、どうやらホイットマンは『草の葉』のさまざまな工夫を当時の読者にうまく受け入れてもらえなかったと感じていたようである。確かに、『草の葉』に対して否定的な意見を述べた批評家がいたのは事実である。その意味からすると、ホイットマンのこうした嘆きは現実に合わせているように思われるかもしれない。しかし、同時に肯定的な見解を示した読者もあり、ホイットマンが主張するように、最初まったく誰からも受け入れられなかったというのは言い過ぎのようにも思われる。たとえば、グリズウォルドはホイットマンのことを「センチメンタルな驢馬 (“a sentimental donkey”）」(Hindus 32) と口をきわめて罵倒したが、その一方で、デーナは「この風変わりな才人 (“this odd genius”）」(Hindus 23) と一定の評価を与えている。また、当時の文学界の巨人ローウエルはホイットマンの才能を認めることを拒否し、否定的な見解を示したが、一方、同じく文学界の巨人であったエマソン (Ralph Waldo Emerson) は手紙までホイットマンに送って彼の文学的出発を称賛している。その独創性とアメリカらしさの樹立への志を、エマソンは高く評価したのであった。さらには、ソロー (Henry David Thoreau) も第 2 版に掲載された “Crossing Brooklyn Ferry” という詩のすばらしさに感銘を受けたとも述べている。ソローにとっても、ホイットマンのこの新たな挑戦はたいへんに興味深かったようである。

とすれば、『草の葉』はホイットマンが後年愚痴をこぼしたように、きわめて否定的に批判

され、まったく受け入れられなかったという主張には同意し難いものがあるだろう。いや、それどころか、現存する批評を読んでも、どちらかというと、否定的なコメントよりも、肯定的な批評の数の方が多かったことが判明している。この点について、たとえばレイノルズは「ホイットマンの年老いてからの回想とは逆に、1855年版は広く配布されていたし、かなりの興味をかきたてていた」（Reynolds 340）と述べているし、グリーンスパンも「敵意のあるものにせよ、ないものにせよ、ほとんどすべての批評家がそのまったくの斬新さと伝統的でないこと（“the sheer novelty and unconventionality”）に驚きを隠せなかった」（Greenspan 150）と要約している。すなわち、ホイットマン本人が主張する、『草の葉』は最初読者からほとんど受容されなかったという感想とは逆に、実際には、一定の評価を得ていたし、当時の読者から肯定、否定いずれにせよ、大きな反応を受けていたことになるだろう。ホイットマンが訴えているほど、詩集の評価は低くなかったはずなのである。だとすれば、なぜホイットマンは自分の作品が受け入れてもらえなかったのだとあくまで主張し続けたのだろうか。

その理由にはいくつか想定されるが、おそらく、一番大きな理由はホイットマンが期待していたような熱狂的な反応が当時の読者から戻ってこなかったという事実ではないだろうか。ホイットマンは、第I節で検証したように「熱狂的に詩人を吸収する」国を求めているにもかかわらず、そのようなレベルでの反応はまったく返ってこなかったのであった。確かに、批評家の反応はおおむね肯定的であったのだが、彼が目指したのは一部の批評家や学者の心をとらえることではなく、アメリカの一般大衆が新しいアメリカ的な詩人として彼を迎え入れてくれることだったのである。しかしながら、ホイットマンが大衆の意義をさかんに序文で言及したり、詩の中の表現方法にまで大きな改変をくわえて、一般大衆向けに書いたにもかかわらず、

彼らからは冷たい反応しか返ってこなかったものであった。たとえば、家族さえも彼が何をしようとしていたのか理解する者がいなかったし、弟のジョージ（George Washington Whitman）にいたっては、いつまでたっても『草の葉』の制作をやめようとしないうちにホイットマンに向かって、「もう世間がお前の作品などいらないと示したんじゃないの？ どうして、ゲームをやめようとはしないの？（“Hasn't the world shown you that it doesn't want your work? Why don't you call the game off?”）」（Hindus 6）とまで告げたとされている。あるいは、19世紀後半の大作家ヘンリー・ジェームス（Henry James）は「あなた［ホイットマン］が呼びかけている当の大衆を尊敬しなければならない。なぜなら、あなたに審美眼というものがないとしても、大衆にはあるのだから（“You must respect the public which you address ; for it has taste, if you have not.”）」（Marinacci 251）とまで言って、ホイットマンの作品が大衆にとって趣味の悪い芸術作品であると主張している。ジェームスに言わせれば、大衆の方にはちゃんとした「趣味」があるのに、それを無視して台無しにしているのは、詩人本人の方だということになるのだろう。こうして見てくると、ホイットマンの意図とは違って、『草の葉』はアメリカ的民主主義を構成する肝心の一般大衆には受容されなかったということになるだろう。あるいは、少なくともホイットマンが期待したような形では受容されなかったのだと結論してもかまわないだろう。

一部の批評家らには高く評価されたものの、ホイットマンが試みたのはそれを越えて、一般大衆からも絶賛を受け、新しいアメリカにふさわしい民主主義を標榜する詩人として自己像を確立することだったのである。彼が従来の文学的慣習を破ったのもそのためであり、たとえば、批評家のエバレットは「彼［ホイットマン］は自分がすべての伝統主義を越えていることを示そうとして（“showing that he is above

every conventionalism”）」(Hindus 51) いるとはっきりその点を認めている。しかしながら、批評家がそう言うしてくれるだけでは、ホイットマンは満足できなかったのだろう。彼は自分の仕事を「アメリカのモデルを供給すること(“SUPPLYING AMERICAN MODELS”）」(NUPM 1588) だとわざわざ大文字で強調してノートの中に記しているが、まさに「アメリカのモデル」の創始者として大衆に「熱狂的に(“affectionately”）」迎え入れられることを望んでいたのがあった。従来のヨーロッパとはまるで異なる新しいアメリカ文化の創造者として、多くのアメリカ人から評価されるのが、彼の真の意図だったのである。

かつて、文学批評理論のなかで、ヤウス(Hans Robert Jauss)は読者の反応を考慮に入れるかたちで「期待の地平」という概念を提唱した。ヤウスによれば「ある文学作品が、表現した歴史的瞬間に、その最初の読者公衆の期待を満たしたり、越えたり、失望させたり、あるいは覆す」(第三テーゼ) ことがある(ヤウス 40) が、これを「期待の地平」という概念で考察したのであった。ヤウスはこの「期待の地平」という概念を明確に定義してはいないが、ホラブ(Robert C. Holub)の解説を借りると「仮説上の個人がテキストに対して持ち込んでくる精神の傾向」(Holub 59)と考えることができるだろう。すなわち、『草の葉』という作品が出版されたときに、最初の読者たちがどのように感じたかという精神的な傾向を、『草の葉』に対する「期待の地平」であると呼んでもよいだろう。そして、この「期待の地平」という概念を今ホイットマンに適應するなら、彼が試みたのは、伝統的ヨーロッパ文学の再現という、当時の一般大衆の有する「期待の地平」を大きく覆すことであった。従来のヨーロッパ的な文学慣習を遙かに凌駕した、新しい文学の成立に応えることが、彼のねらいだったのである。だが、実際には、一部の有識者らの「期待の地平」を変更することにしかつながらなかったのだと表

現してもよいだろう。一部の批評家に高く評価された点からすれば、『草の葉』という詩集の出版は、ある程度まで文学的「期待の地平」を覆したとは言えるかもしれない。しかしながら、「アメリカのモデルを供給する」という、さらに大きな詩人の願望という観点からすれば、必ずしも成功とは言えなかったのである。すなわち、熱狂的に大衆に迎え入れられる国民的詩人という、ホイットマンが希求した地位を獲得するには至らなかったのである。期待の地平を大きく変える国民的な詩人として受容されることは、遂になかったのだ。そのため、後年ホイットマンは自らの業績に不満を抱く結果になり、一部の識者の賛同を得たとはいえ、自分の希望はかなえられなかったと感じたのだというのが真実のところであると思われる。

参考文献

- Allen, Gay Wilson. *Walt Whitman as Man, Poet, and Legend*. Southern Illinois UP, 1961.
- Asselineau, Roger. *The Evolution of Walt Whitman : The Creation of a Personality*. The Belknap P of Harvard, 1960.
- Bohan, Ruht L. *Looking into Walt Whitman : American Art, 1850-1920*. The Pennsylvania State UP, 2006.
- Clarke, Graham, *Walt Whitman : The Poem as Private History*. Vision P, 1991.
- Folsom, Ed. “Nineteenth-century Visual Culture.” In Donald D. Kummings (ed.), *A Companion to Walt Whitman*. Wiley-Blackwell, 2009, 272-289.
- Greenspan, Ezra., *Walt Whitman and the American Reader*. Cambridge UP, 1990.
- Hindus, Milton ed, *Walt Whitman : The Critical Heritage*. Routledge & Keagan Paul, 1971.
- Holub, Robert C. *Reception Theory : A Critical Introduction*. Methuen, 1984.
- Marinacci, Barbara. *O Wondrous Singer! : An Introduction to Walt Whitman*. Dodd, Mead & Co., 1970.
- Myerson, Joel ed. *Whitman : In His Own Time*. Omnigraphics Inc., 1991.
- Perry, Bliss. *Walt Whitman*. Houghton Mifflin Co., 1906.

- Reynolds, David S. *Walt Whitman's America : A Cultural Biography*. Alfred A. Knopf, 1995.
- Schyberg, Frederik. *Walt Whitman*. Columbia UP, 1951.
- Sontag, Susan. *On Photography*. Farrar, Straus and Giroux, 1977.
- Trachtenberg, Alan. *Reading American Photographs : Images as History Mathew Brady to Walker Evans*. Hill and Wang, 1989.
- Trimble, W. H. *Walt Whitman and Leaves of Grass : An Introduction*. Watts & Co., 1905.
- Whitman, Walt. 『草の葉』 杉木喬他訳 岩波文庫 1988.
- . *Leaves of Grass*. Ed. Sculley Bradley. W. Norton & Company, 1973.
- . *Notebooks and Unpublished Prose Manuscripts*. Ed. Edward F. Grier. New York UP, 1984.
- . *The Journalism, 1834–1846*. Ed. Herbert Bergman. Peter Lang, 1998.
- . *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman*. Ed. Emory Holloway. Doubleday, Page & Co., 1921.
- . *Walt Whitman of the New York Aurora*. Ed. Joseph Jay Rubin and Charles H. Brown. Bald Eagle P, 1950.
- ヤウス 『挑発としての文学史』 岩波書店 1979。
- Zweig, Paul. *Walt Whitman : The Making of the Poet*. Basic Books, 1984.